

コロナ禍で深まった利用者家族との関わり

～ご本人、ご家族に寄り添って～

施設名：介護老人保健施設 平成苑
発表者：介護 上原薫

【はじめに】

コロナ禍も2年余りが経過し当苑でも基本的な感染対策をしながら、デイケアを継続してサービスを提供することができている。利用者様は、外出制限や限られた交流の中で過ごすことが増え、ご家族からは苑での活動や内容に対して疑問や相談を受けることがあった。そこで当苑では、デイケアの様子をご家族に具体的に伝えることが安心につながるのではないかと考えた。今回は、当苑の感染対策と家族との関わり方の見直しについてご報告する。

【基本的な対策】

- ・ 自宅で家族からの体調確認と検温、来苑時の検温
- ・ 送迎時の手指消毒、車内アルコール消毒
- ・ テーブル上にアクリル板、テーブルの間隔
- ・ テーブルや椅子、器具備品等の消毒
- ・ 定期的な換気・水分補給・お手拭きの常備
- ・ 利用中の体調不良、37.5度以上の発熱の場合 Dr 報告し家族へ連絡。診察室にて隔離をして頂き調整ができ次第帰宅。自宅待機しPCR検査を実施。「陰性」であれば利用再開。

【コロナ禍の集団活動】

2～3名で間隔を取りながら20分程度実施。立ち上がり訓練等は4名程度。平行棒で対面にならないように配置。
苑外の歩行訓練は2人までとしスタッフが同行。レク活動の「おやつ作り」は利用者1人につき1つの作業として調整。

【事例紹介】

氏名：Y・O様 93歳 女性 介護度：4
本人と家族のニーズ：時々腰が痛くなる。立ち座りがきつい。リハビリを受けて筋力・体力を付けて立ち座りが楽にできるようになってほしい。
移動：車椅子、ADL：全介助
食事：個人専用の食器使用

【経過】 コロナ禍前までは、孫やひ孫が自宅に週3回程遊びに来て、話をしたり外出をする機会があり本人の楽しみがあった。しかし感染予防の為に家族の訪問や外出の機会が減り自宅で過ごすことが多くなった。その為身体機能面の低下(筋力)や嚥下機能の低下が認められた。

ご家族からは、「デイケアに通っているのに、どうしてトイレで立たせるのが大変になったり、あまり話をしなくなってしまったのでしょうか。」と苑での活動内容に不安と疑問を相談された。しかし現在は感染予防の為に見学できない状況となった。そこで日中の様子やリハビリ、レク活動を写真や動画を撮影して介護スタッフが説明をしながら見せた。

【結果】 自宅では見られない動作や表情を実際に確認することができて安心していただけた。ご家族も利用者に対して自主訓練や活動を増やすことができ介助量が減った。又日中自宅での介助負担が多かったが動画を観て本人が出来るのにやらないという認知的な影響もあることが分かり、気持ちにゆとりができたこと、ご家族から報告を受けた。

【考察・まとめ】 コロナ禍の感染予防ばかりに目を向けてしまいご家族のケアが不十分だった事に気が付かされた出来事であった。コロナ禍という状況だけでも不安やストレスを感じるなかでご家族は、長期介護のストレスもある。私たちは、改めてご家族や介護者の不安に寄り添って、日ごろの関わり方を丁寧にしていかなければならないと感じた。

今後の課題として苑では今まで以上に在宅支援の取り組みを理解し意識を変える必要がある。笑顔で共に過ごせるように、1人1人違った生活環境に対する包括ケアができる施設を目指していく。